居間の変化と客間・寝室の配置からみた二階建て住宅の理念形成

－ 明治後期～昭和初期刊行の住宅関係単行本の言説にみる近代都市独立住宅の二階建てに関する研究 －

THE IDEA OF 2 STORY HOUSE FROM THE VIEW POINT OF CHANGE OF ROOMS
FUNCTION AND ARRANGEMENT

－ The study on 2 story urban modern houses with discourse analysis of housing books published in prewar Japan －

舘上 貴由樹*, 内田 青蔵**

Takayuki FUCHIKAMI and Seizo UCHIDA

This paper clarified the idea of 2 story Japanese urban houses with the discourses analysis 63 housing books published from the late Meiji to early Showa periods. We confirmed that the function of Japanese traditional housing room the “Ima” changed from private room into public room (as a western living room) during the Taisho periods, accordingly the discourses of drawing rooms arranged on 2nd floor were centralized in middle of Taisho period, the discourses of bedrooms were appeared from the late Taisho to early Showa period. We considered that the function differentiation of the Ima lead to formed the 2 story houses idea.

keywords : 2 story houses, Modern housing, Housing books, Living room, Drawing room, Bedroom
二階建て住宅, 住宅近代化, 住宅関係単行本, 居間, 客間, 寝室

1. はじめに

日本の住まいにおける二階建ては、江戸期の町家や長屋などで確認できるが、一階と同じように二階を居室¹⁾に充てることは上流階層の屋敷や別邸など一部に限られていた²⁾。そうした意味で一般的な住まいに二階が広く浸透し始めたのは明治期以降といわれており³⁾、二階化の要因のひとつとして「間取りの機能分化が進み、複数の部屋が必要になったこと」⁴⁾があげられる。本稿はこの観点から、とりわけ当時の「居間」⁵⁾（以後「居間」の「」を略す。）の変化について着目する。居間は従来、私室の機能を主として夜は就寝の場であり、客の応対にも利用されるなど多様な機能を包含していたが、大正期以降にいわゆる「家族本位」の住居観が形成されるに伴い、「家族団らん」の場や、欧米的な「リビングルーム」へのイメージ転換が積極的に試みられた。もちろん他の居室にも変化は見られ、互いに影響し合ったことも考慮すべき⁶⁾ではあるが、居間は住宅の近代化のなかで間取りの機能分化に最も大きな影響をおよぼした居室であると考えられる。また当時の居間の変化については「建築家だけに通用する概念」という限定的な展開⁷⁾であったという解釈があるものの、住宅の間取りを近代的な価値観に対応させようとする理念的な動向を捉える意味ではむしろ重要であり、こうした動きのなかにこそ二階建て住宅の間取りに対する先導的な考えが含まれているとも考えられるのである。本稿は二階建て住宅の間取りの変化がどのような背景をもとにして形成されたのかを、居間の変化に伴う「客間」⁸⁾、「寝室」⁹⁾の居室の二階配置の動向から検討するものである（以後「客

間」、「寝室」の「」を略す）。

これまでの近代住宅史における二階に着目した研究については、明治期の二階の座敷の様子を分析したものに、東京・佃島の住居類型の変遷をみた江面¹⁰⁾、福岡・柳川の住宅における二階座敷の造りの変化を考察した百田ら¹¹⁾、大阪・池田新市街（室町）の分譲住宅の平面形態について分析した吉田¹²⁾の研究があげられる。前二者は町家の形式を含みつつも建設年が下がるにつれて二階が床の間付きの座敷として利用されていく発展的な様子について、後者は明治末期の最も早い時期に計画された郊外住宅地の二階建て住宅平面に注目し、二階が客座敷に充てられていた実態に言及している。以上のような実例を扱った研究のほかに戦前期の都市住宅提案の二階居室用途の変化に着目し、住宅平面における階段の位置関係から検討した古俣ら¹³⁾、図案の数量分析から検討した立川ら¹⁴⁾の研究があげられる。両者とも当時の建築家の著した住宅関連書籍に掲載されている住宅図案を分析したものであり、提案的な内容を含む理念的動向として限定されるが、いずれも大正期後半頃から接客から家族用寝室への二階居室用途の変化について指摘している。

ところで近代における住宅平面の変遷に関する研究については、木村の研究¹⁵⁾を嚆矢として、その後幾多の検討¹⁶⁾が重ねられ、中廊下形住宅平面、居間中心形住宅平面をはじめとする近代的な住宅平面形式の成立過程が明らかにされているが、そうした検討の中にも当時の二階平面に対する提案の様子について触れられている。宮崎らは大正期における家族本位計画論の成立過程に一階南面する最も

* 佐賀大学大学院工学系研究科 助教・工修(神奈川大学研究員)

Assist. Prof., Graduate School of Science and Engineering, Saga Univ., M. Eng.
(Researcher of Kanagawa Univ.)

** 神奈川大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Kanagawa Univ., Dr. Eng.

良い場所を居間に譲り、客間は二階に配置するという「2階座敷説」¹⁷⁾が存在したことについて、また青木¹⁸⁾は生活改善同盟会の「住宅間取り及設備の改善」を参照し、公私を明瞭に区別するには二階建てとし寝室を二階に設けることが推奨されたことに言及するなど、居間の変化から住宅平面の二階化を想記させる興味深い指摘がなされている。しかし、これらはあくまで主階である一階平面における居間の配置を主体に論じる過程で指摘されたもの¹⁹⁾であり、二階建て住宅の変化の様子については断片的である。

以上の既往の成果を整理すると、大正期において二階の家族寝室化の兆しが窺われ、それは今日定着している二階の寝室利用の考え方に通ずる可能性が考えられるものの、一・二階双方の動きを含めた二階建て住宅としての平面構成の変遷については具体的に明らかにされていない。

筆者はこれまで、近代における二階建て住宅平面の変遷に関する研究を行ってきており²⁰⁾、二階建て住宅に対する理念形成とそれに伴う平面構成の変遷過程を明らかにすることを目指している。そして、この二階建て住宅の理念形成を分析するための資料として当時の建築家ら²¹⁾が著した単行本を主史料として着目してきた。住宅に対する計画的な考え、とりわけ居間、客間、寝室の3室の対応関係を単行本ごとに抽出でき、その通時的な変化の様子を丁寧に見ることができると判断したためである。

以上のように、本稿は戦前期の単行本を主史料として接客から家族寝室への二階居室用途の変化が指摘されている大正期を中心にその前後を含めた期間である明治後期から昭和初期までを対象期間とし、建築家らの言説から一階居間の変化に伴う客間および寝室の二階配置の動向とその背景について分析することで、近代都市独立住宅の二階建てに対する理念形成を明らかにすることを目的とする。

2. 研究史料について

本稿は、「二階」「二階建て」の計画を導く条件や考えを多分に抽出できる資料²²⁾として住宅関係の単行本（以降、住宅関係単行本と略す）を用いる。住宅平面の重層化は何らかの条件や意図が働くことで検討される場合もあり、住宅平面理論に関する言説に必ず記述されるとは限らない。従ってなるべく多くの情報のなかからどの時期に二階を扱う言説が集中するのかを明らかにする必要がある。住宅関係単行本は明治後半頃から新しい社会階層として台頭した俸給生活者を中心とする都市中流層²³⁾を主たる読者層としたものであり、明治後期以降に刊行数は急増した²⁴⁾。通俗的に書かれ、住宅手引き書としての性格²⁵⁾をもつ書籍が多く含まれ、世間一般に対する住宅改良の啓蒙書としての役割を担ったとみることができる。したがってこれらには住宅建築に対する基本原則である各部屋の機能と間取り方法が丁寧に解説されているものが多く、間取りに対する考えの変化を居室ごとに細かく読み取るうえで最適な史料であると判断した。

住宅関係単行本の選出方法として、国立国会図書館所蔵図書²⁶⁾から日本十進分類法の「建築学」²⁷⁾、「住宅建築」²⁸⁾に該当する明治期から昭和初期（戦前期）までに刊行された単行本を対象とし、そのうち、住宅居室の配置方法に関する言説が含まれている記述を分析対象として扱うこととした。なお、雛形本、研究書、海外・先駆的事例の掲載を中心とした専門的内容に特化した書籍、また独立

住宅以外の貸家、長屋、店舗兼住宅など専用住宅以外に焦点をあてている書籍については、当時の都市独立住宅における二階居室配置の動向をみる上でやや異なる方向を示す可能性が考えられるため対象から除外した。以上の選出方法に該当した書籍、計63冊を住宅関係単行本として分析対象とする（表1_左欄部分）。

3. 居間の機能・配置方法の変化に伴う客間と寝室の二階配置動向

居間の機能・配置方法の変化に伴う客間および寝室の二階配置の動向をそれぞれの対応関係として見るために、3室の居室配置を見るうえで重要と思われる項目を挙げ、文献ごとのその記述有無について整理した（表1_居間、客間、寝室欄）。ここでは各項目の言説について現れる時期および期間を3室の影響関係から整理することにし、二階配置の言説については次章で分析する。なお居室ごとにみられる変化を追ううえで、他の項目の動向と比較する必要があるため、各項目をa～rの小文字英字で表記し、かつ各項目に該当する記述が連続的に確認できる場合は、当該期間を小文字英字に数字を付して表した（例：a1, b1, 以下同様に扱う）。

3. 1 居間の機能・配置方法の変化

はじめに、居間の動向について検討した結果、居間の「機能」、[起居様式]ならびに「配置方法」に関する言説を整理した（表1_居間欄。[]は表1の項目名称を指す。以下、同様に扱う）。居間には様々な機能が含まれているが、客間および寝室の二階配置を間取りにおける公私領域の確立の過程として捉えるならば、居間に対する公私の捉え方の変化に着目できる。この観点から「私室」、[家事監督]、[家族共用]の3つの機能を取りあげることができた²⁹⁾。これらの言説の動向をみると、最初の1899(明治32)年の『家屋改良談』(No. 1)に確認できたのは「私室」の機能である。その後の文献でも、「日常起居する家族等の居間」³⁰⁾、「主人、夫人居間」³¹⁾というように「家族個々人の居間」の意図が含まれ、こうした記述は1921(大正10)年の文献まで継続的に確認できる(a1)。ところがこれ以降は急減を示し、居間の解説に「私室」としての機能は含まれなくなる。続いて「家事監督」の機能については、1915(大正4)年『理想の住宅』(No. 9)から1928(昭和3)年の文献まで「私室」に付加される形で継続的に確認できる(b1)。この「家事監督」は、「居間の位置の選び方は其の家の主婦にとつて最も緊要で…(中略)、居間の選び方が悪いと書生の取締は勿論萬事に不便ことが多い」³²⁾というように、居間を主婦の家事行動の拠点とみなすもので、先の「私室」と比較するとやや公的な意味合いが含まれていると見られる。そして「家族共用」の機能については、1919(大正8)年『楽しき住家』(No.14)において最初に確認できる。「居間(リビングルーム)…中略、リビングルームは晝間いつも居る室で、談話讀書等…」³³⁾というように、居間を「リビングルーム」と称していることから欧米的な居間空間を参考にしていることが分かる。このような言説は1921(大正10)年以降増え、1923(大正12)年から昭和期へと継続してみられる(c1)。以上3つの項目ごとの継続期間の推移を追うと、当初は「私室」の意味として居間の説明がされていたのが、大正期に入るとそこに「家事監督」の機能が付加され、大正期の後半頃に境に「私室」から「家族共用」へ居間の機能が移行することが分かる(a1, b1, c1)。

次に居間の「起居様式」の動向を見る。基本的には「床座」³⁴⁾の

解説が対象期間中まんべんなく確認できる（d1）。これに対し〔椅子座〕は1915（大正4）年の『理想の住宅』（No.9）において最初に確認でき、その後しばらく出現頻度は少ないままであったが、1923（大正12）年『理想の文化住宅』（No.25）から増加し、昭和期以降も継続して確認できるようになる（e1）。

こうした動向を踏まえつつ居間の〔配置方法〕の動向と照らし合わせながら見ていくと、まず、1899（明治32）年『家屋改良談』（No.1）に「（居間は）寒冷ならしめざる事極めて必要なり之を南側に移せば日當りよくして」³⁵⁾と、最も早い文献で既に〔南面配置〕の言説が確認できる。ところが明治期の他の文献では「日光の透射の可い、静かな場所」³⁶⁾のように、従来の居間の〔私室〕の秘匿性への配慮から、明確に南面を推奨することが記述に現れていない。つまり明治末期までの文献には居間の〔南面配置〕は定説化されるには至っていないと見られる³⁷⁾。（a1, f 列）ところが大正期に入ると様子に変化が現れ、次のような〔南面配置〕を推奨する言説が連続して確認できるようになる（f1）。

居間は毎日晝夜とも使用する所であるから、便利多き階下を撰んで、夏は涼しく冬期は暖かい所、即ち南向の日當りよくして風通し宜しき所に設けねばならぬ。従つて庭園も居間より眺めることになるのである。居間の位置の選び方は、その家の主婦にとつて最も大切で、押入の附け方から、土蔵、納戸との関係、廊下へ出る工合、臺所との関係、客室、玄關、女中部屋への連絡等を研究して、最も適當な場所を選びたい。居間の選び方が悪いと、下婢や書生の取締は勿論、萬事に不便な事が多い。

（納屋松藏 編著『經濟本位の住宅』鈴木書店, T9.2（No.15））

このように、居間に対して〔家事監督〕の機能が加わり、〔私室〕の役割が希薄になったことが作用して〔南面配置〕が明確に記述されるようになったと解釈できる。さらに1921（大正10）年を境にして、〔住宅の中央部〕の言説が増える（g1）。そこでは以下のような言説も現れ、居間の公室化により間取りにおける重要度が増すようになる。

居間は家庭全體の中心となるのですから、其の位置は家屋の中央に位し、…（中略）、必要な家具は中央に居間卓子と椅子とそれによい氣持の肘掛椅子に寝椅子を取り混ぜて…（中略）、生活改良の立場からいっても住宅は家族本位にしなければならないと思ひます。（…（中略）は筆者による。以下同様に用いる）

（文化研究会 編『文化住宅の研究』文化研究會, T12.4（No.26））

このように、居間を「家庭全體の中心」とみなし住宅平面の中央部分に配置することを標榜しつつ、〔椅子座〕を基本とした家具の解説が付されるなど、洋室化した家族共用の居間、すなわち「リビングルーム」の居間空間³⁸⁾が想記される。こうした傾向が強まることは〔椅子座〕および〔住宅の中央部〕が同時期の1921（大正10）年以降から継続的に見られることから確認できる（e1, g1）。

以上のように大正期を中心に、居間機能の公室化から間取りにおける重要度を増していく様子が窺える。これは当時の建築家らによる居間に対する概念変化の過程³⁹⁾に他ならず、住宅関係単行本の言説を刊行年順に通観した場合でもこうした動向の現れを読み取ることができる。

3.2 客間の二階配置に関する動向

客間に関する言説から、その配置方法について項目ごとに分けて整理した結果、大きく〔二階配置〕〔兼用〕〔その他〕に分けることができる（表1_客間配置欄）。まず明治後期～大正期初頭の文献では、部屋の方位に注意が払われている様子が窺えるが、南面もあればその逆の北面を主張する言説も見られ一貫していない（11）。大正中期に入ると1919（大正8）～1923（大正10）年刊行の文献に〔二階配置〕に関する言説が継続して確認できる（i1）。そののち一時期掲載頻度を減少させるものの、再び1933（昭和8）年以降に継続して確認できる（i2）。昭和期以降になると〔居間兼用〕と〔応接間・書斎兼用〕といった客間との〔兼用〕が継続的に確認できるようになる（j・k1）。総じて大正8～12年頃の期間に〔二階配置〕が集中的に見られ、昭和期以降には〔二階配置〕と〔兼用〕の双方に分散する。

以上を居間の動向と照らしてみると、居間の〔家事監督〕〔南面配置〕と客間の〔二階配置〕が継続的に記述され始めた時期が重なる（b1, f1, i1, 【I】で示す線）。つまり居間の機能が公的な性格を帯びはじめ南面配置の言説が定着したことより、それまでは部屋の方位のみが客間の配置方法の論拠であったものから、二階への配置を言説として導き出す契機になったと解釈することができる。

3.3 寝室の二階配置に関する動向

寝室の配置方法についても同様に整理した結果、客間と同じく〔二階〕〔兼用〕〔その他〕に分けることができる（表1_寝室欄）。〔二階配置〕の記述は、1915年（大正4）年の『理想の住宅』（No.9）から1926（大正15）年の文献まで継続的に確認できるが、多くは〔洋風住宅・洋室〕の場合に限定して推奨されたものであつて、反対に〔和風住宅・和室〕の場合は一階配置を推奨する記述が続けて見られる（m・n1）。こうした傾向に変化がみられるのは大正後期から昭和期初頭にかけでであり、昭和期に入ると〔和風住宅・和室〕への言及自体が急減し（m1以降）、〔洋風住宅・洋風〕への言及についても、断続的な頻度に減少する（n2）。こうした減少傾向と反対に大正後期頃から住宅の〔和洋区別無〕く寝室の二階配置を推奨するような言説が徐々に確認できるようになる（o1）。一方〔兼用〕については、1907（明治40）年から1921（大正10）年にかけて〔居間兼用〕が継続的に確認できる（p1）、これも大正後期以降にやや出現頻度が低下する（p2）。

以上を居間の動向に照らしてみると、大正期後半に、居間の〔家族共用〕〔椅子座〕〔住宅の中央部〕が継続的に記述され始めた時期と、寝室の〔居間兼用〕の出現頻度の低下と〔和洋区別無〕く二階配置が推奨された始めた時期が、概ね重なるように捉えられる。（c1, ei, g1, o1, p1, 【II】で示す線）。つまり「居間は普通の場合主人と夫人の寝室をも兼ねるもの」⁴⁰⁾とされていた従来の一階・居間での就寝行為が居間のいわゆる「リビングルーム」化によって希薄にさせたことがその誘因の一つとなり⁴¹⁾、相対的に二階配置の言説が増加したものと解釈することができる（n2, o1）。

4. 客間ならびに寝室における二階配置の言説化について

これまで客間、寝室の二階配置に関する言説の出現頻度について居間の機能・配置方法の変化と対応しながら検討した。続いて客間、寝室の二階配置の言説化がどのような背景をもとに形成されたかを記述内容から検討する。なお、客間、寝室それぞれの言説のなかで居間と関係する記述内容も抽出し、あわせて検討を行う（表2、表3）。

表 1 対象文献リストおよび居間・客間・寝室の記述動向

対象文献リスト					居間										客間配置				寝室配置																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
文献 番号	刊行年月 (西暦/和暦)		著者	書名	出版社	機能		起居様式		配置方法						二階 配置	兼用			その他 (二階・兼用に該 当しない場合)	二階配置		兼用		その他																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
						私室	家事 監督	家族 共用	床 座	椅子 座	南 面 配 置	中 央 部 の 配 置	住宅の その他 (キーワード)	居間 兼用	応 接 用 書 庫 兼 用		その他 (二階・兼用に該 当しない場合)	和 風 和 室 住宅	洋 風 住宅		和 洋 区 別 無	居間 兼用	他 室 兼用																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
																								a		b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
1	1899.3	M32	土屋元作	家屋改良談	時事新報社																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									

範例 ○：該当記述あり ・：直接的言及は無いが文章内容、挿図ならびに他の項目解説から推察できるもの —：記述内容等からは判断できないもの
●：二階配置を推奨・容認 △：二階配置に疑点を示す ×：一階配置を推奨 ■ 濃いグレー網掛け部分：居室解説項目無し ■ 薄いグレー網掛け部分：「居間及び茶の間」の解説項目
■■■■■■■■■■：概ね継続的に確認できる期間 ■■■■■■■■■■：断続的に確認できる期間

表 2 客間の二階配置に関する記述の動向

文献 番号	刊行年 (和暦)	客間配置に関する記述 (居間との位置関係、あるいは二階配置についての言説のみ抜粋)	二階 以外	二階配置 居間に 配慮	二階配置 居間と 無関係	二階配置 敷地 規模
1	M32.3	南向きの日當りよき所…家族を追込み苦痛を與ふるの不都合ある…客間を北側に移し居間と入り替へしむべし	北側			
2	M35.11	二階上に配置する間室は客間應接の間書斎の間如き日常起居せざる室に充てられ、…客間のために…最も好位置を塞ぎ、日常起居する家族等の居間は好位置を得ざるごとあり、故に客間は北側に移し…	北側		○	
9	T4.12	近來は居間を本位とする…特に客間とは定めず…平常は居間として使用し、來客の際次の間に移るやうにしておけば、東南に面した最良の場所を無駄に明けておかずにすむ。	兼用			
11	T8.1	客座敷本意にせず、居間本位の方である。…若し敷地が狭い場合には客間を二階に設けるのも良い。…客が来たとき、種々の物を持運ぶに非常に不便…けれども階段の構造を注意して、素に昇降し得るやうにすれば…		●		◎
13	T8.8	近來は居間を本位とする…特に客間とは定めず…平常は居間として使用し來客の際次の間に移るやうにして置けば東南に面した最良の場所を無駄に空けて置かずし済む。	兼用			
14	T8.9	二階は寢室や浴場などの私の場所(プライベート)に宛てる可き…、市街の家なら別ですが…、郊外又は幅とりのある屋敷にある家は階下へ來客を招く室を作る可き…			×	○
16	T9.2	好位置に設ける必要はない。客室と居間とは同等もしくはそれ以下に遇して差支へない…若し敷地の狭い場合には、二階に設けても差支えない。…物の持運び上不便であるが、階段の構造に注意して、素に昇降し得るやうにすれば…		●		◎
17	T9.2	有用な室を犠牲にして南向きの日當りの好い場所を損んで客室とするのは甚だ無意味…、居間にも食堂にも用いられる部屋とする方が有利…若し敷地が狭い場合には、客室を二階に設けるのも一策…種々のものを持ち運ぶに甚だ不便…階段の構造に注意して昇降を容易にすれば…家人の内相談又は勝手向の雑音が漏れて…氣遣ひはなく…	兼用	●		◎
18	T9.5	北向を以てして居間茶の間の南向とする主義の家族本位はよいが…客間は一面屋敷の主軸となるもの、庭園に面せしめ…位置として二階に開取するを不可し…			×	
20	T9.7	理想は、玄関近く階段を設け、二階に取りたい…階段の構造、市に注意すれば何でもい事…之は居間と遠ざかり、來客をして直ちに達せしむる事の便利がある。		●		
21	T9.9	家族本位の住宅に於て、之をそのみを顧みざるの誤れること…されば敷地の関係によつて、之を階上に取付け、物を運ぶには昇降器式によるのが最良の法である。…一般に居間、主人室、主婦室等に近くして、玄関より遠からざることとを要とする。		●		◎
22	T9.10	居間本位を説く方が遙かに優秀で…必ずしも好位置に取設けるには及ばない。…出来るだけは設計を工夫して客室をも優遇…それには客室を二階にするのが最も上乘の方法である。これならば敷地が狭くとも差支えない階下と通つて家人の話し聲…勝手向きの雑音なども聞えないし、且つ眺望もよいから來客の居心地も好く、家族の者も遠慮が要らなく…		●		◎
23	T10.11	普通は二階に設けるのがよいと思ふ。階段は玄関の近くに設け、その構造や巾などに又注意すれば、別に不便もなく、且つ臺所とか居間とか、从つて勝手向の方面を來客に見せない様にする意味に於て極めてよいと…		●		
24	T10.12	客間でもなく居間でもない廣い無名の部屋を作ることとする。それは板張りにておこく…	兼用			
25	T12.3	経済本位の小住宅として客座敷などを設けるのは、却つて其の主旨に悖るもので、家族のためには此の上もない不都合…				客間不要
26	T12.4	二階の一室を純日本式に敷設とて、老人とか又は婦人の來客のため…、又不時の泊まり客のための豫備室に…非常に都合がよからう…			●	
28	T13.4	客間に重きを置き過ぎて…肝心な家族達の起居する場所迄が、いつかつち除けにされて…住宅と云ふものの本来の目的にも反すること…玄関近くよりは稍々奥まつた…場所が望ましく…	家の奥			
31	T13.10	今日及將來の中流住宅では特に二室を設くるの必要はない。…方今の生活改善と住宅そのものの使命を具す意味から…接客本位の居住様式を改革すべき主旨に沿うものである。				客間不要
32	T14.6	和式の明放しの構造では…二階に置くことが便利…家族の模様によつては、…敷地の関係上、貳階建てを餘餘なくせらるることが多い…			●	○

次頁につづく

表2のつづき

33	T14.8	近來は居間を本位とする…平常は居間として使用し来客の際の間に移るやうにしておけば、東南に面した最良の場所を無駄に空けて置かず済む…	兼用		
34	T15.5	家族本位で、接客本位でないことは從來屢々繰返された説…客室を冷遇するが如きは、その意を曲解したもので、来客に對して非禮である…位置としては…また二階に設けるも差支えない。…成るべく玄關に近き所を撰んで…その間の連絡を緊密ならしめ…		●	
35	T15.10	近來は居間を本位とするのが多い。…、特に客間とは定めて、…平常は居間として使用し、来客の際の間に移るやうにしておけば、東南に面した最良の場所を無駄に明けておかず済む。	兼用		
37	S3.6	從來の日本家屋の客間は庭園に面した。最も善き位置…習慣がありましたが…、絶體に家族本位とすべきが近代の理想で、…来客に甚だしき不便と不快とを與へぬ程度のものであればよい…	兼用		
38	S3.10	特別に一室設けることは少く…、特に設ける場合でも…居間を客間に兼用してある…	兼用		
43	S6.9	居間が住宅の最上位…客間は従ひの位置でよい…中流住宅の客間は…居間と並べて南面の位置におくとか、常住の場所でない二階におくとかして…		●	
45	S7.5	應接室即ち客間…絶對に家族本位とするのが近代生活の理想で客間及玄關の如きは中小住宅に在つては、来客に甚だしき不便と不快を與へぬ程度にしておき度い…	兼用		
49	S8.5	玄關に近く、而も部屋を通り抜けないで行き得ること…二階建の家にあつては、よく二階に持つて行く…居間其他の部屋を兼用とする場合が少くない。…家族の終始暮す部屋でないから従とすべき…	兼用		●
50	S8.8	二階の家に於ては、客間を階上に設け、階下は居間に用ゐる場合が多くなつた…			●
52	S10.12	日本風客間の必要な時は、二階の中央の穴を設け…			●
53	S11.2	この本では「客間即ち應接室」といふことにしてお話することに致します…客間などのやうな接客本位の部屋は、来客に不愉快な…不便な感じを與へぬ程度のものであればよい…小住宅の場合には…獨立して一部屋とすることは困難…多くの場合、居間と客間が兼用される…	兼用		
54	S11.7	單に接客用なら…最良の位置を…居間茶の間に譲り、第二流の位置に移してよい。	兼用		
55	S12.10	普通住宅としては應接室と同様に…来客の爲の客室を用意する必要はない。主人居間兼用として充分…	兼用		
56	S13.7	小住宅では客間と居間とを兼用したのも多い…餘裕があれば専用の一室を設け…二階に之の客間を設けるのもよい、此應接室の位置等に充分の考慮を払うべき…	兼用		●
58	S13.8	客室を廃することが出来難いとするは、客間は如何にすべきかといふに、應接室を廣くしてこれを兼用するのも一案…中流以上の家では居間食堂に最もよい位置…階下に餘裕のないときにはは應接室に近い階上に設けるのもよい、階上は日常の諸室と適さかり見晴らしもよく、給仕には多少不便…	兼用		●
60	S14.6	應接室よりは、くだけた客が来るのと、二階に取る場合が多いので、南面に浴所、便所、浴室等を造ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大概は居間を寢室に兼用…			●
61	S15.10	從來のやうな奥まつた處でなく、表近くに配置し、居間からも通けるやうになすべき…又二階建の場合には、二階に設けるのも良いが、併し應接室をも兼ねる場合は…絶對に階下で…。書斎を兼ねる場合は、階下よりも寧ろ階上が理想的…	兼用		●
62	S16.6	玄關に近く他の室を通り抜けないで行き得ることが必要條件…二階家では客間を二階に持つて行くことがある。…特に切詰めた家では、客間専用の室を設けず書斎や他の室と兼用する場合も少なくない。…日當りのよい位置を理想とするが、家族の終始座席する部屋でなら従とすべき…	兼用		●

範例 ●：二階配置を推奨・容認しているもの ×：二階配置に否定的・不可としているもの ○：文章内容から推察されるもの ◎：敷地規模(狭さ)と関係して二階配置に言及しているもの
 兼用：居間、応接間、書斎等の他居室との兼用を容認しているもの ■薄いグレー網掛部分：居間との関係について述べている記述(二階配置の言及なし) ……：記述文の省略

表3 寢室の二階配置に関する記述の動向

文献番号	刊行年(和暦)	寢室配置に関する記述 (居間との関係、二階配置に関する要点的言説のみ抜粋)	二階以外	給排水設備 言及なし	給排水設備 言及あり
1	M32.3	強ひて寢處を別にせんとしなば盛に二階家を造るべし邦俗の二階屋を嫌ふは昇降の不便なと食物持運びの難儀なるに因るのみ		●	
3	M39.9	寢室は階上に設けるを普通とす		●	
5	M40.4	貴顯の人を除きては…各室疊敷を利用し寢臺の設け無く夜具を敷きて横臥するを常とす	兼用		
6	M41.11	我が邦の生活法…他室を兼用し得られるゆゑ。寢間を別置するを要せず。否要せざるにあらず。狭き家に於ては、到底別置するを得ざればなり…	兼用		
7	M42.6	家によて専用の寢室を設けることの出来ぬ所がある。…大抵居間を以てこれを兼用する。けれども出来るならば寢室は欲しい…	兼用		
8	T2.6	我國では貴顯の人を除いては…各室の疊敷の上に…各自居間を以て寢室に充て…寢室を特に設くるならば階下よりは二階がよろしい	兼用		
9	T4.12	洋館の寢室は十中八九までが二階であるが、日本風では二階に洗面所浴室等を作ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大抵は居間を寢室に兼用…	兼用		×
11	T8.1	西洋建ての寢室は十中八九迄は二階であるが、日本風では、二階に洗面所、便所、浴室等を造ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大概は居間を寢室に兼用…	兼用		×
12	T8.2	洋館寢室に充てる諸室は一つの階上に總めて他の日常諸室と錯雑してはならぬ。…又浴室をも接近させておく方が便利である。			○
13	T8.8	洋館の寢室は十中八九までが二階であるが、日本風では二階に便所洗面所浴室等を作ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大概は居間を寢室に兼用…	兼用		×
14	T8.9	寢室は二階へとるのがお定りで…浴場と便所も寢室に近くなければ不便ですから、自然、二階にせなければなりません			○
15	T9.2	現在の日本の中流住宅では多く…一つの室を色々の目的に畫は居間に…夜は寢室に用ふ…経済其の他の関係に餘裕があれば、完全な寢室を設けて…	兼用		
16	T9.2	寢室に充てる諸室は一つの階上に總めて、日本風では、二階に洗面所、便所浴室等を作ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。日本風では大概居間を寢室に兼用…	兼用		×
17	T9.2	日本に於ては多く居間と兼用する習慣…西洋にあつては大抵階上に之を設ける習慣…日本の構造にあつては階上に洗面所、浴室、便所等を設備する便を欲いてゐるから、階上に取設けるのは甚だ不得策…	兼用		×
18	T9.5	西洋の寢室なるものは日本住宅の居間の中に入つて居る。…静かなるべく室を奥深くとり、他の騒々しさに煩はされない位置、階上にてもよし	兼用		
19	T9.6	寢室はすべて二階に取るのが普通である		●	
20	T9.7	もし二階がある場合には二階に設けたい。		●	
21	T9.9	洋式建築にあつては殆ど階上に設けるやうであるが、階上に洗面所便所を設ける便を欲く日本住宅にあつては、階下に日當りよき東南向きとし、…我國の風習として一般に居間又は茶の間を之に充てて、夫れを日むを得ぬ…	兼用		×
22	T9.10	寢室は大抵居間を以て之に兼用…理想的としては勿論別に一室を設くるに越したことはない。…西洋風ならば二階に之を設くるのが通例…日本風では洗面處、便處、浴室などを二階に設くることが困難であるから、階下の方が便利…	兼用		×
23	T10.11	從來居間または茶の間などを寢室に兼用してゐるものが多く様であるが、理想としては、別に一室を設くるに越したことはない。西洋式建築では、二階に設けるのが通例…日本式の建物では、二階に便所や洗面所を設けることが困難…失墜し階下の方が便利…	兼用		×
25	T12.3	主人用の寢室とモーニングルームとは階上に設けたい。…しかし衛生工事すなわち給排水設備の不備は日本では階上に浴室と便所を設けることができないので、これを設けることは頗る困難…			△
26	T12.4	文化的住宅としての様式建築を撰ぶ以上…寢室の設備を必要…二階のある家では階上に寢室を定めるのがよろしい…		●	
27	T12.8	寢室は二階に取るのが一番よろしい。一階の場合には意には板戸を取付ける必要…		●	
28	T13.4	洋風の住宅でも、多くは此の寢室を階上に若しくは屋根裏を應用して設けて…之れは安眠を得ると云ふ點からも云つても…至極適當な好位置…		●	
29	T13.4	夜間睡眠の用に供すべき室…寢間の位置を二階にすべき理由は明瞭…給排水設備が二階以上に及ぶこととなれば、二階は…寢間を置くべき最も相當の位置…			△
31	T13.10	寢室は從來二棟に使用されて來た居間を椅子式に改むる必然の結果として獨立するもの…健康・採光と換氣上に重大なる關係を持つ寢室を重く見ねば…寢室を置く可く階上が最も適當の位置…		●	
32	T14.6	二階を寢室とする場合、裏階段による浴室へ通する便宜を考へて置かねば…洋風殊に米國風の住宅では、浴室内に浴槽ばかりでなく便器や洗面器をも備へつけて…私共の習慣や現状からして日本の住宅に同様の型を用ゐるわけにはゆきません…			△
33	T14.8	普通洋館の寢室は十中八九までが二階…日本の家屋ではこの二階に便所、洗面所、浴室等を設けることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大概は居間を寢室に兼用…	兼用		×
34	T15.5	洋式にあつては階上に設けるのもいいが、在來の日本家屋としては、階下に設けて、浴室、洗面所、便所等に通する連絡を便にし、採光通風を完全に…	一階		×
35	T15.10	洋館の寢室は十中八九までが二階であるが、日本風では、二日に洗面所、便所、浴室等を作ることが不便…階下の日當りのよい東南を調べばよい。大概は居間を寢室に兼用…	兼用		×
38	S3.10	二階建の場合には、之を二階に設けるのが最も適當…但し此の室を二階に設ける場合には、便所や洗面所又は浴室と共に二階に設けることを條件とせねば…			△
39	S4.4	當今多く階上に設ける様になりましたの理想的と思ひます。		●	
41	S6.6	寢室は成る可く二階に設けて獨立せしむべき…便所と化粧室の連絡は是非考慮せねばならぬ。…寢室が二階なれば便所、化粧室も同時に二階に設け度い…そこで二階に寢室を造つた場合には…階段段室の傍に設けて寢室との連絡をつた方がよい。			◎
42	S6.6	洋風住宅では二階を作るのが普通…寢室を二階にとりまして第一に問題になるのは便所との關係であり…西洋…便所が浴室と共に二階にありますから差支ありませんが、普通の日本住宅のようにならざる場合には階段の位置と便所との關係をよくし…			◎
43	S6.9	和風住宅では…特別の部屋の必要もなく、居間や、茶の間、客間などが、そのまま寢室に使はれるといふのが古來の習慣…特に寢室といへば…寢臺を用いた洋風寢室を呼ぶ…二階建のときには、主人主婦の寢室は二階につけるのが、静かで、適當…	兼用		●
45	S7.5	二階に設くるのが便利であり、生活の都合も良い…此場合二階にも便所を設け度い…二階に便所を設くる事は完全の下水の無い都市では簡單に出来ぬ…二階には男女共小便の出来るビデを設けて夫れに水が用出流はる様にし、給管にて一階の便桶に送る様にし…			◎
46	S7.6	日本式寢室は、居間兼用し得れども不衛生にして且つ手数を要する缺點あり、寢臺式の場合には寢室を特設するを要する。…上階に配置するを可とす。	兼用		●
47	S7.11	寢室専用とすることは理想ではあるが経済的問題も伴ふので、普通の住宅としては居間を兼用とする場合が多い…	兼用		
48	S8.1	寢室をその目的の爲みに備へる住宅は大住宅のみ…我國の住宅に於ては大抵…座敷、茶の間等が随時その目的の爲に用ひられてゐる。	兼用		
50	S8.8	此の部屋は閑靜にして通風の良き所…必ず太陽の直射を採り得る場所…二階建に於ては此の理由により、階上に設くる事が多い…		●	
51	S9.9	二階建ての場合には二階にこの室を設ける。又便所、浴室化粧室等も寢室の近くに配すべきである。			○
52	S10.12	…夏季日中一階を涼しくして、更に二階を涼しくする事は、ほとんど出来難い…二階に主人の書斎や寢室を設くる事は、敷地の狭い場合以外は、なるべくやめた方が工合良い…	一階		
53	S11.2	寢室を獨立して一部屋とすることの出来ない場合…居間と寢室を兼ねることがいいと思ひます。	兼用		
54	S11.7	小住宅にあつては、日中不要な、そして相當面積をもつ一室を設備することは許されぬ…日本風に於ては他の目的にも兼用せしめたが得策…洋風住宅ではよく二階に設けるが、萬一の場合にたやすく避難し得る様に近づくに階段やバルコニー…	他室兼用		●
57	S13.7	二階建の家であれば、二階のが大抵の場合静かで…二階に寢室を取れば良い。			●
58	S13.8	外國の住宅では階上は殆んど寢室として使用され…間取の關係から階上がよい…日本に於ては階上の寢室が喜ばれないのは階段が急…便所や手洗いがなく使用上不便…、家屋が木造であるために、火災、盗難等の心配…これらの設備を改善しなければ當分階上の寢室は厄介…			△
59	S14.6	玄關及應接を西側に設け、中央部に居間を配置した場合には、當然の結果として寢室は東側に設くる…、若し東南部に寢室を配置する事が出来れば、最も理想的…	東南		
60	S16.6	他に南面の室が必要なので、敢て寢室を持つて行かない…夫婦の寢室…子供等の寢室…何れも二階にあつて、バルコニーに出られるやうにして…		●	
61	S15.10	和風の寢室は、一般に客室にもなり、又は居室其他の室にも…、便利で経済的ではあるが、不衛生な事はこの上なく…洋風…寢食を握付けとなすため…非常に能率的…二階建ての場合には階上に設けるがよい。併し老人や兒童等の寢室は、階段の昇降に能く少いペダルを起こす…階下にとするがよい。…便所や浴室、洗面所等に配置する事が出来得れば理想的…	他室兼用		△
62	S16.6	小住宅では、主に居間と兼用としてゐる…寢室を設くるのは少い。ベッドルームの位置は、…二階建のときは二階へ取るの最もよい。	兼用		●
63	S16.11	和風住宅では座敷居間等が寢室として兼用されるが、衛生上寢室を獨立させることが望ましい。…外國では寢室を二階に取り、寢室の近くに浴室及び便所を付属させる習慣…乍ら風呂、便所の構造が全く違ふ日本では一般に出来難い。	兼用		△

範例 ●：給排水設備(二階)の問題に対する解決策を提示し、二階配置に対応 ○：二階に給排水設備を設けることで二階配置を推奨 △：給排水設備(二階)の問題の現状に言及しつつも二階配置を容認(解決策の提示なし)
 ◎：給排水設備の問題に言及せずに、二階配置を推奨・容認 ×：給排水設備(二階)の問題の現状から一階配置を推奨・容認 兼用：居間を寢室として利用することを容認(他居室との兼用については他室兼用と表記)
 ■薄いグレー網掛部分：居間との関係について述べている記述(二階配置の言及なし) ……：記述文の省略

4. 1 客間の二階配置の言説化

客間の二階配置に関する記述について、居間に対する配慮の有無を判別しながら、その記述内容を整理した（表2）。最初の1899（明治32）年『家屋改良談』（No.1）および1902（明治35）年『通俗家屋改良建築法』（No.2）の2つの客間配置の記述に既に居間への配慮が読み取られる。それらは「客間を北側に移し居間と入り替らしむべし」⁴²⁾や、「日常起居する家族等の居間は好位置を得ざることあり、故に客間は北側に移し」⁴³⁾という記述内容であり、客間を北側に配置するといった対処法であった。このうち『通俗家屋改良建築法』には客間の二階配置にも触れられているものの、居間への配慮から二階配置が導かれてはいない。そして大正期の初頭を過ぎると次のような記述が現れるようになる。

普通は家の最上の部分を客座敷と定めるが近來は居間を本位とする人も往々ある。…（中略）、平常は居間として使用し、來客の際次の間に移るやうにしておけば、東南に面した最良の場所を無駄に明けておかずにすむ。

（保岡勝也『理想の住宅』婦人文庫刊行會，T4.12（No.9））

「居間を本位」、すなわち家族本位⁴⁴⁾の方針が客間配置の記述のなかに明確に示され、客間の配置方法に居間を配慮することを前提とする構図が形成される。ただしこの言説では「平常は居間として使用し、來客の際次の間に移る」という続き間座敷を活用した居間との兼用案であり、居間の南面化の問題も併せて答えようとしていて、まだ二階配置の考えは導かれていない。そして1919（大正8）年の以下の記述になると居間との兼用案とともに二階配置の言説が現れる。

平常は居間として使用し、來客の際次の間に移るやうにしておけば東南に面した最良の場所を無駄に明けて置かず済む。…（中略）、若し敷地が狭隘な場合には客間を二階に設けるのも良い。人に依つては、客座敷を二階に設けたならば、客が來たとき、種々の物を持運ぶに非常に不便であらう云ふ人もあるだろうが、成程階下に比すれば階上は都合が悪いけれども階段の構造を注意して、楽に昇降し得るやうにすれば左程不便を感じることは無い筈である。

（高橋鉄造『経済で便利な家の建て方』東亜堂書房，T8.1（No.11））

こうした居間の配置を優先しつつ客間の二階配置案に結びつけるような記述は上記を含め大正8～10年の文献に集中している（表2「居間に配慮」の項目に相当）。また、これらの言説には、「敷地規模」と関係づけながら記述されていることにも注目することができる。先の記述とは別の一例を次に記す。

客室の位置に就ては…（中略）居間本位を説く方が遙かに優秀で、又合理的…（中略）客室を二階にするのが最も上乘の方法である。これならば敷地が狭くとも差支えないし…（中略）若し之を階下に設けるとすれば、一軒の家で室を全部南向にすると云ふことは不可能で、それには中庭を取れば幾分其の目的を達することが出来るが、その代り面積が廣くなるので、不経済の場所も出て來ることを覚悟しなければならぬ。

（近岡佐吉『模範図説と洋住宅建築集成』鈴木書店，T9.10（No.22））

このように居間本位を掲げつつ、客間の二階配置を推奨することに

対して、「これならば敷地が狭くとも差支えない」と見解している。その後には客間を一階配置することを想定した場合の記述が続き、「全部南向にすると云ふことは不可能」、「中庭を取れば幾分其の目的を達することが出来るが、その代り面積が廣くなるので、不経済」として一階平面だけでは居間と客間の両方を南面配置させることが困難な敷地規模を前提におきつつ、二階配置を推奨している。こうした「若し敷地が狭隘な場合には」、「敷地の関係によって」などといった同様の記述が対象期間を通して大正8、9年頃の文献に集中している（表2_◎の記述に相当）。ところがその後の文献の言説を追うと、こうした記述は継続せず、「二階家では客間を二階に持つて行くことがある」⁴⁵⁾など、客間を二階におくことの意味に触れないまま紹介されるなど、やや形式的な扱われ方も現れる（表2「居間と無関係」の項目に相当）。これは昭和期以降に「居間兼用」や「書斎・応接間兼用」の兼用案が増えたことと関係すると見られ、（表1_j・k1）、一つの独立した居室として客間を確保すること自体にやや消極的な見方が出始め⁴⁶⁾、二階配置を積極的に推奨する論拠が希薄化したことが要因に挙げられる。

ちなみに、客間を二階に設けること自体については、実際は大正

図1 一階・二階平面の両方に客間の室名表記をもつ図案
（金子清吉：『日本住宅建築図案百種』第六十四圖，1913.09（大正2年9月））

図2 二階座敷を客間、一階座敷を居間と表記している図案

（納屋松蔵：『増補参千圓以下出来る趣味の住宅』第三十一圖，1920.02（大正9年2月））「玄關は北に面して南を明け、西は直に隣家に接し、東は若干の空地があつて採光に充分である…（中略）階段は玄關より直接なるがよく、又階段の配置も此の家族には適當で、殊に多數の來客のある場合に便利である。」

期以前には既に一般化していたとみられる⁴⁷⁾。ただしそれは図1⁴⁸⁾のような、一階と二階両方に座敷を配し、接客利用の融通を利かせることを重視する間取りの方針⁴⁹⁾が支配的であったとみられる。このことを踏まえながら大正中期の動向を改めて見ると、居間の南面化をはじめとする家族本位の主張の間取り方法に取り入れるため、一階の座敷を居間に譲り、残る二階座敷を客間にする事で対応しようとする動きから、客間の二階配置が言説化したとも捉えられる。すなわち「2階座敷説」⁵⁰⁾はさほど敷地に余裕のない都市住宅的な二階建て住宅の間取りを想定し、当時の実態に即しつつ居間と客間の共存策から導かれたものであったと推察できる(図2)。

4. 2 寝室の二階配置の言説化

寝室の二階配置に関する記述については、二階配置の要点として給排水設備の二階化に対する言及の有無により、その記述のされかたに大きな差異がみられたため、それらをもとに整理した(表3)。給排水設備の二階化に対する言及は大正期の文献から次のように記述され、それ以降継続的に確認される。

洋館の寝室は十中八九までが二階であるが、日本風では二階に便所洗面所浴室等を作ることが不便であるから、階下の日當りのよい東南を撰べよい。大概是居間を寝室に兼用する。

(鎌田賢三『増補千圓以下で出来る理想の住宅』鈴木書店, T8.8 (No. 13))

このように、洋館における寝室配置を「十中八九までが二階」と例に挙げながら、日本風の住宅では「二階に洗面所浴室等をつくるのが不便」として一階の日当たりの良い東南に面して設置することを示唆している。ただしそこには南面配置化した居間と位置が重なることも見越して、「居間を寝室に兼用」することを追認するかたちがとられている。洋風住宅と和風住宅の住宅設備に対する基本的な捉え方の違いを対比的に用いながら、寝室の設置階の対応方法を区別するような論述方法は、これ以降の文献にも連続して確認できるが、その文体がどれも酷似している。恐らく過去の著書からの引用が繰り返されている可能性が高いとみられるが、そうであったとしても、二階に水回り設備をおくのが困難な状況は、当時の建築家らにとってそれほど二階を計画するうえで共通する懸念事項であったとも考えられる。それは寝室以外の記述内容である「給水と排水」という項目における言説からもその様子が窺える。

建物の排水状態をみると、一般に甚だ不潔不完全であつて、何人も今日の有様で満足するものはありますまい。かく給水に比して排水が甚しく幼稚であるのは何故でありませうか。その主なる原因は都市下水施設の未完成すなわち都市に汚水を派除する設備がないからであります。今後都市に下水の設備が完備しますと…(中略)、便所の糞尿も水洗式の便器と、之に連なる污水管との設備によつて、全然密封のまま悪臭や有害な瓦斯の発散を防止しつつ、二階からでも、三階からでも安全に市設の暗渠に排除し得られるのであります。

(藤井澤『簡易洋風住宅の設計』鈴木書店, T13.4 (No. 29))

ここでも国内における都市下水整備が及んでいない状況を憂慮しており、二階以上の階の計画をより自由なものにするためには便所の水洗化が必要不可欠な技術的要素と捉えられていた。また他の文献

図3 玄関から奥の位置に便所と階段を配置した図案

(宮田莊一郎:『吾等の住居』第十二圖, 1931.06 (昭和6年6月))

玄関より奥まった位置に階段を配置し、その付近に便所を配置することで二階寝室からの便所までの動線と玄関からの視線に配慮が見られる。

では、「位置は出来る限り最も閑静なる場所を撰び便所、手水場、浴室等に近く(洋室の時に特に然り)配置し…」⁵¹⁾の記述に見られるように、寝室と水回り空間を一体的に捉えるような見方、つまり西洋住宅の就寝空間のイメージを背景⁵²⁾にしながら説明していることも、寝室の二階配置の言説化を鈍らせる要因であったとみることが出来る。ところが、昭和期の初頭を過ぎると、それまでの記述のしかたに対してやや変化をつけたような言説が現れるようになる。それは以下のような記述であり、

洋風住宅では二階を作るのが普通であり…(中略)、寝室を二階にとりまして第一に問題になるのは便所との関係であります。西洋人は從來寝室を便器を備へましたし、また便所が浴室と共に二階にありますから差支ありませんが、普通の日本住宅のように便所が下にある場合には階段の位置と便所との関係をよくしまして…

(山本拙郎『和洋住宅設備設計の知識』實業之日本社, S6.6 (No. 42))

二階に便所を設くる事は完全の下水の無い都市では簡単に出来ぬのでありますから、私は二階には男女共小便の出来るビデを設けて夫れに水が出て洗はる様にし、鉛管にて一階の便槽に送る様にして居ります。

(山田醇『住宅建築の実際』新光社, S7.5 (No. 45))

というように、一階便所と階段の位置関係に配慮すること(図3)、または簡易的な便所設備を二階に置くことで寝室の二階配置に結びつけようとする方針が読み取れる。前述した給排水設備の二階化そのものを見るのではなく、現実的な工夫が提示されているといえよう。こうした言説の該当数は昭和期の文献全体から見ると限られているが(3/28件、表3の◎が付く部分の記述)、「居間を寝室に兼用する」言説が、なかば引用的に繰り返されて用いられていた時期(表3_給排水設備の×に相当する記述)と比較すれば、寝室の二階配置に対する言説が内容的に進化したと捉えられる。全般的には大正後期から、[和洋区別無]く寝室の二階配置を推奨するような言説が増加しており、そのなかでこうした言説が含まれていることから(表1_o1部分のNo41, 42, 45が該当)、寝室の二階利用の模索が進み始めた段階とみることができる。

5. 結論

本稿は、明治後期から昭和初期までの住宅関係単行本に掲載された客間、寝室の居室配置方法に関する言説を対象に、その二階居室配置に対する動向およびその背景を一階における居間の機能とその配置方法の変化と照らし合わせつつ読み解くことで、近代都市独立住宅の二階建てに対する理念形成を明らかにした。以上の結果を居間の動向から捉え直すと以下のような変遷をたどることができる。

明治期は従来の私室としての居間機能に大きな変化は見られず、客間や寝室の配置方法への影響は見られなかった。大正期に入り、居間が公的な意味を持ち始めることで南面配置が重視され、さらに「家族本位」という考えが定着し客間の間取り方法にまで居間への配慮が明確に示されたことにより、大正中期において客間の二階配置が言説化した。そして大正後期になると居間の「リビングルーム」化が言説に現れ、家族共用の団らん場としての洋室（椅子座）の居間空間も想定されるようになった。それは従来の居間に備わっていた就寝機能を分離させる契機となり、それに影響するかたちで大正後期～昭和初期頭の期間において寝室の二階配置が言説化した。

そして客間の二階配置は居間と客間の間取りの共存策として言説化したのに対し、寝室の二階配置は就寝空間の独立を目的とする一貫的な取り組みのなかで言説化したものであり、技術的な問題に依る姿勢も一部で確認できた。つまり二階の寝室化の志向性が認められ、わが国現代住宅の二階のあり方が戦前から構築されようとしていたことが指摘される。

こうした一連の言説から読み取られるのは、様々な生活行為の包含が許容されていた在来的な部屋概念から、居間の役割を明確に規定させていく建築家らの試みであって、その行程から間取りの機能分化が生じている。そこに二階に間取りの余地を見出そうとする姿勢が読み取れるのであり、これが二階建て住宅に対する理念形成の背景であると考えられる。こうした建築家らによる間取り方法の言説化の蓄積は、戦後から現代の独立住宅に対する計画的思考の基盤となった可能性は十分に考えられ、二階建てでもそのなかに含まれているのである。

謝辞

本研究を進めるにあたり、平成27年度佐賀大学大学院工学系研究科若手研究者支援経費の助成を受けた。記して感謝したい。

注

- 1) 本稿で扱う居室とは、住宅において継続的に使用される室の一構成要素としての意味で用いるものとする。なお「居室」は個人専用の部屋の意味として用いられる場合もあるが、意味の混同を避けるため個人専用の部屋は「私室」として区別することにする。
- 2) 上流階層の住宅建築における二階建ては、例えば臨春閣や拾翠亭といった現存遺構が明治期以前のものとして確認できる。いっぽう商家における二階建ては規制の対象であったものの、京阪地域では18世紀後半から住宅の背後の部分で二階座敷が発達し、江戸では18世紀から本二階の形式が多かったといわれている。ただし二階を一階と同じように居室として利用することは、裕福な階層に限定されると見られる。江戸期の町家における二階の発達には鈴木嘉吉『日本の民家6 町家』（学習研究社、1980）に詳しい。
- 3) 日本の住宅における二階建ての増加の動向は、戦前期までの住宅関連の統計資料が乏しいため、具体的な数字として表すことは困難であるが、現存遺構や史料から二階の存在について度々報告されている。また、江面嗣人：『日本の美術 449 近代の住宅建築』（至文堂、pp. 64-65, 2003）では、「近代の住宅の二階化」について、また大岡敏昭：『日本の住まい その源流を探る』（相

模書房、p. 73, 2008. 3）では「住まいの二階化」について述べられており、こうした記述からも近代の住宅における二階化の浸透の様子が窺える。

- 4) 『日本の美術 449 近代の住宅建築』（前掲書（注3））では「都市人口の増加に伴う居住面積の不足」に加えて、「間取りの機能分化」を近代における二階化の要因にあげている。
- 5) 本稿では「居間」そのものの機能変化を取り扱うため、対象文献に掲載されている間取り方法に関する解説において「居間」と記載されているもの全てを対象とした。なお一部の文献にて「居間及び茶の間」というような、茶の間と一体的に解説される場合があり、これも対象に含めた（その場合は表1「居間欄」にて、薄いグレー色で網掛け表記して区別した）。
- 6) 平井聖：「近代都市住宅に於ける茶の間」（学苑 No. 803, pp. 1-21, 2007. 9）によれば、近代において「茶の間」の概念変化がみられ、南面する座敷と並び、間取りの中心的な位置を占めるようになったことが指摘されている。「茶の間」は「居間」に隣接することが多く、機能も互いに共通する部分がみられるため、この「茶の間」を含めた動向を分析する必要性はある。しかし間取りの機能分化と二階の居室配置という観点では、「居間」の動きの方に特徴的な変化が見られたため、本稿の分析では「居間」のみに対象を絞った。
- 7) 青木正夫・岡俊江・鈴木義弘：『住まい学体系 102 中廊下の住宅 明治大正昭和の暮らしの間取りに読む』（住まいの図書出版局、pp. 172-175, 2009. 3）によれば元来、私室の意味をもっていた「居間」は生活改善同盟会によって「団らん空間としての居間」として概念規定されたが、それは「建築家だけに通用する概念」にとどまるものであったとし、戦後高度成長期にようやくそうした意味内容への移行がみられると述べている。なお一般的な解釈として、戦前までは「茶の間」が団らん空間の役割をもっていたと述べている。
- 8) 本稿で取り扱う「客間」とは、接客利用を一義的に考えた部屋を指し、客間、客室、（床の間付きの）座敷の室名表記が用いられているものを取り扱う。
- 9) 本稿で取り扱う「寝室」とは、家族個人の就寝利用を一義的に考えた部屋を指し、寝室、寝所、寝間の室名表記が用いられているものを取り扱う。
- 10) 江面嗣人：「明治・大正期における佃島の住居の類型と変遷」日本建築学会計画論文報告 No. 396, pp. 100-113, 1989. 2
- 11) 百田直美・松岡高弘：「柳川の住宅に於ける2階の造りについて－柳川の近代の住宅に関する研究 その11－」日本建築学会九州支部報告 No. 55, pp. 609-612, 2016. 3
- 12) 吉田高子：「池田新市街（室町）分譲住宅地と住宅について－近代中流階級住宅の成立に関する研究－」近畿大学理工学部研究報告 No. 25, 1989. 9, pp. 271-280.
- 13) 古侯和将・内田青蔵：『階段』からみたわが国戦前期の住宅の変遷に関する一考察－戦前期に刊行された住宅関連書籍を主史料として－日本建築学会学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp. 449-450, 2014. 9
- 14) 立川智浩・丹羽和彦：「わが国近代における『二階』の展開」日本建築学会学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp. 589-560, 2003. 9
- 15) 木村徳国：「日本近代都市独立住宅様式の成立と展開に関する研究」、北海道大学工学部研究報告 No. 18 ～ 21, 1958 ～ 1959
- 16) 青木正夫：「明治以降の住様式の変化・発展に関する一考察」（住宅建築研究所報 No. 12, 1986）により木村の学説（注15）について一部見直しははかられた。さらには内田青蔵：『日本の近代住宅』（鹿島出版会、1993）により通史的整理が施されるなど、近代的な住宅平面の成立過程に関する史的研究は充実したものとなっている。
- 17) 宮崎信行・青木正夫・友清貴和：「大正初期の我が国における家族本位計画論の成立について－衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その4－」（日本建築学会計画系論文集 No. 496, pp. 65-72, 1997. 6）において、山崎孝吉による座敷の二階配置の言説を引用し（光岡義一編『住宅建築』世界建築社 1916. に収録）、これを家族居室の南面配置をめぐる計画論上の1つの試みと紹介し「2階座敷説」と定義している。しかし「町家の例にみられるように、在来住宅の平面計画内容」が含まれ、「在来住宅の立場を脱していない」家族本位計画論の成立途上の考えであったという位置づけがなされている。なお「2階座敷説」の出現時期やその具体的内容は分析されていない。
- 18) 前掲書（注16）
- 19) 前掲書（注16）、（注17）、双方とも住宅平面計画理論の成立過程を主題とする研究であり、二階建てを分析した研究ではない。そのため居室の二階配置方法については一部の事例紹介にとどまっている。
- 20) 主に、淵上貴由樹・内田青蔵：「わが国近代の住宅における『寝室』の二階配置について－明治後期から昭和初期に刊行された住宅関連書籍の記述を用いて－」日本建築学会大会学術講演梗概集（建築歴史・意匠）、pp. 877-878, 2016. 8、淵上貴由樹：「階段位置・二階動線からみた近代和風邸宅の二階平面の変化」日本建築学会九州支部研究報告 No. 55, pp. 613-616, 2016. 3. なお本論文

- は 2016 年日本建築学会大会学術講演での発表内容をもとに大幅な加筆・修正を行ったものである。
- 21) 明治期から昭和戦前期までにおける住宅平面理論に対する議論には、建築設計を専門とする建築家だけでなく、建築技師、学識経験者、教育者、著述家等といった建築家以外の意見が多分に含まれている。それは当時、建築家という職能が未だ確立途上の段階であったことにも関係するからであろうが、世間一般の関心事でもあった在来住宅問題の改善という意味において、様々な見識の角度から住宅に対する意見が出されたことは重要であったと考えられる。そのため本稿では「建築家ら」の言説として包括的に扱うこととした。
- 22) 住宅関係単行本を史料とした分析方法とは別に、建築専門誌を史料とする方法が考えられるが、専門誌という情報媒体の性質上、住宅建築に関するある特定のテーマに絞られて記述される傾向にある。本文にも述べているように、「二階」、「二階建て」は主階である一階部分への言及に比べると副次的な内容であることが考えられるため、雑誌という限られた紙面上に住宅理論として言及されるのは限定的であると考えられる。その意味では住宅関係単行本の方が、個々の建築家らが住宅に対する考えを完結して述べる事が出来る環境にあると考えられ、居室の二階配置に関する言説を対象期間においてまんべんなく収集できると判断した。
- 23) 「中流」という社会的階層範囲について、木村は「中流住宅の概念と敷地確立は切り離し得ないもの…（中略）住宅規模にかかわらず…」(前掲書(注15))と述べ、敷地の確立されている住宅を「中流」の条件にあげている。すなわち確立した敷地に居を構え、家主自ら住宅間取りを思案する行為が可能の人々を都市中流層として捉えることができ、こうした階層の頭端が通俗向けの住宅関係単行本の需要を喚起させたとも考えられる。一方で住宅規模から「中流」を捉える方法も考えられるが、本稿では住宅図面を用いた分析を行わないことから、以上のような広義的な意味から捉えるものとする。
- 24) 近代における住宅関連書籍の刊行増加傾向については、田中友加里・藤木竜也：「1950年代までの住宅関係書籍にみる刊行推移とその分類について 住宅関係文献にみる住まいの様相に関する実証的研究」(日本建築学会中国支部研究報告集 No.33, 2010.3) に詳しい。これによれば 1920(大正9)年から 1939(昭和14)年の期間に大きく刊行数を増加させていることが報告されており、それは本研究の対象とする史料の刊行年の構成と概ね一致する(表1)。
- 25) 例えば、文献番号 34 の坂口利夫：『十坪より五十坪迄模範住家の設計』(鈴木書店, 1926.5) の目次の見出しを例にすると、「計画から施工まで」、「各室の設備と建具」、「室内装飾の基調」、「家庭電化の常識」、「美しき庭園と門牆」、「構造並に材料の見方」、「模範住家間取圖集(附録図)」といったように内容が多岐にわたる。そして序文には「本書の期する所の要は、一に住宅建築の常識を訓練して」と記されている。このように当時刊行された住宅関係単行本の多くは、建築の素人や初学者向けに対する手引き書としての性格を帯びていた。なお祐成保志：『住宅』の社会学(新曜社, 2008.10)によれば、「住宅手引き」という出版ジャンルの確立として、1920年前後にこうした種類の書籍が多数刊行されていたことについて言及している。
- 26) 2016 年 4 月 10 日時点の「国会図書館サーチ」の検索結果による。
- 27) 日本十進分類法(NDC)分類記号: 520
- 28) 日本十進分類法(NDC)分類記号: 527
- 29) 表1の項目にあげている他に、居間の解説には「食事」や「就寝」といった生活行為に関する記述が含まれる。これらは居間の代表的な機能であるが、「食事」はどちらかといえば居間に隣接する台所や茶の間の方に関係するとみられ、また「就寝」については「寝室」の二階配置の言説から居間との兼用について述べられ、そこで相互の関係について確認できるため、居間の分析項目から割愛した。
- 30) 井上繁次郎：『通俗家屋改良建築法』博文館, p.18, 1902.11
- 31) 駒村謹治・越本長三郎：『和洋住宅建築学 下巻』須原屋書店, p.216, 1907.4
- 32) 保岡勝也：『理想の住宅』婦人文庫刊行會, pp.159-160, 1915.12
- 33) 西村伊作：『楽しき住家』警醒社書房, pp.37-38, 1919.9
- 34) 本稿で扱う床座は、基本的に畳敷きの床を想定している。ただし床座であっても板敷きの場合は、椅子や卓子などの洋風家具が置くことも可能となり、さらには畳敷きであってもその上に絨毯を敷いて洋風家具を配置すれば椅子座となる。したがって言説や解説図からこのような内容が読み取られる場合については、[床座][椅子座]両方ともに該当するものとした。
- 35) 土屋元作：『家屋改良談』時事新報社, p.109, 1899.3
- 36) 内山正如：『家屋と庭園』博文館, p.88, 1909.6
- 37) 宮崎信行・青木正夫：「明治30,40年代の我が国における家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みについて—衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究その3—」(日本建築学会計画系論文集 No.483, pp.111-120, 1996.5)によれば、家族居室の南面配置の試みは明治30,40年代にはすでに、計画論上の試みとして一層具体的に記述され、家族本位の平面計画観は形成されていたと述べられており、理論として既に確立していたと見られる。本稿で扱う建築家らの個々の言説に継続的に現れるのは、大正期以降のことであるため時期的な差異がみられる。恐らくこうした理論的な考え方が建築家らに咀嚼・浸透し、それが単行本の間取り方法の解説に言説として扱われるまでに一定の時間を要したことが要因に考えられる。
- 38) 「生活改良の立場」から家族本位に言及していることから、大正10年9月に生活改善同盟会が示した提言「住宅の間取及び設備の改善」による影響が考えられる(『建築雑誌』No.419, 日本建築学会, 1921.9に掲載)。「共用室と専用室との別を設けること。…(中略)、先づ共用室を椅子式に改めよ…」と解説され、共用室としての居間、すなわち「リビングルーム」としての居間空間が念頭に置かれていた。生活改善同盟会を主体とする住宅改良の試みは、建築界を超えたムーブメントとして拡がりを持ち、大正後期の建築家の住宅思想に一定度の影響を与えたと考えられる。なお生活改善運動の動向については内田青蔵：『日本の近代住宅』(注16)に詳しい。
- 39) (注7)と同じ
- 40) 三橋四郎：『理想の家屋 中』大倉書店, p.22, 1913.6
- 41) 青木の研究(前掲書(注16), p.20)によれば「居間が椅子化したため必然的に寝室は出された形で必要となった」と述べており、寝室の独立化が促されたと考えられる。
- 42) 前掲書(注35) pp.108-109.
- 43) 前掲書(注30) p.18.
- 44) 宮崎らの研究(注17)によれば、「家族本位」の言葉を用いて、接客用居室に対する家族用居室の優位性を概念的に示したしたのは伊東忠太の「中流の住宅は如何に設計すべきか」が始まりであるとしている。(『婦人の友』主婦之友社, pp.24-31, 1916.8に収録)。それ以前の明治期においても、家族居室を重視する考え方はあったが、明確な言葉によって概念規定されたことにより、家族用の居室、とりわけ居間を重視する方針が形成されていった。
- 45) 笹治庄次郎：『住居の設計 新編図解』p.39, 1941.6.
- 46) 例えば、西田竹治：『現代建築我家の知識』(須原屋書店, p.75, 1940.10)では、「中産階級では、客室として客のみに使用する獨立した室を設ける事は経済がゆるさない。併し乍ら、來客のあつた場合等、客を通すべき整頓された室がないやうな事であつては、實に困惑せざるを得ないやうな事もあるものであるから、このやうな場合に、應接室兼客室と謂ふやうな、假令小さな室でもあれば、赤面をせずにすむばかりでなく、非常に便利で、決して不經濟な事はない」のように、室機能の兼用提案がみとめられる。その要因として、木村(注15)や西山卯三(『日本のすまいII』勁草書房, 1967.6)が述べているような大正期から昭和期までの住宅提案における「中流」規模の下降が関係していることがあげられる。つまり住宅のコンパクト化のなかで、客間に対する書斎や応接室との兼用化が図られていったと考えられる。
- 47) 前掲書(注10)、(注11)、(注12)明治期の独立住宅の二階には、接客利用を想定した床の間付きの座敷が設けられていたという報告がなされている。
- 48) 図1の出典である金子清吉：『日本住宅建築図案百種』(建築書院, 1913.9)は、図案とその解説文のみで構成された単行本であり、本稿が分析する居室配置方法の言説が掲載されていない。そのため対象文献からは除外されているが、本稿の定義する住宅関係単行本の性格を満たすものであり、明治後期～大正初頭の住宅提案の動向を見るためには有用な資料と判断できるため、この書籍に掲載されている図版を用いた。
- 49) 図1に示す図案に併記されている解説文には「家族女中等六七人暮しに適す、南に門を有し、玄関より直接に二階客間及び下客間等に通ずるを得」としていることから、その住宅規模と居住人数からして通常は客間を家族居住の場に充てられることが想定できる。それでも一階・二階の座敷を客間として位置づけているのは、様々な接客場面にも対応可能とする接客時の融通性の重視、すなわち接客本位の考え方によるものと考えられる。
- 50) 前掲書(注17)
- 51) 張管雄：『中流住宅』通信協会, p.128, 1933.1. ()表示は原文ママ。
- 52) 『高等建築学14巻』(常磐書房, pp.131-132, 1933.6.)によると、「洋風住宅では一般に二階に寝室を置き、これに浴室及び便所を附属させる習慣になっている(面白い事に、便所が二階だけにあつて一階にない様な家が西洋には實に澤山あるらしいのである)。浴室(兼便所)は寝室1箇乃至2箇に一つづつ附属する様な場合が多く、大きな住宅に於いて、浴室の数だけでも相當の数になる。日本人が洋風生活を模倣して行つた場合、一般にこの様な方法まで真似するや否やでは多少興味ある問題であらう」と、ここでも西洋住宅の寝室が水回りと一体的に計画されている様子に触れながら、日本の住宅に対して西洋的な就寝空間をどこまで参照するべきかを注視している。なお引用文中の () 表示は原文ママ。

THE IDEA OF 2 STORY HOUSE FROM THE VIEW POINT OF CHANGE OF ROOMS FUNCTION AND ARRANGEMENT

– The study on 2 story urban modern houses with discourse analysis of housing books published in prewar Japan –

Takayuki FUCHIKAMI and Seizo UCHIDA***

* Assist. Prof., Graduate School of Science and Engineering, Saga Univ., M. Eng. (Researcher of Kanagawa Univ.)

** Prof., Dept. of Architecture, Kanagawa Univ., Dr. Eng.

This paper clarified the idea of 2 story house in modern Japan by using the discourse of 63 housing books published from the late Meiji to early Showa periods.

From the previous research it is thought that functional differentiation of floor plan promoted 2nd floor planning. Therefore, this research focused on the change of the "Ima" of the 1st floor at the time. "Ima" conventionally had the function as a private room, but also included various functions such as accompanying functions of sleeping and talking with visitors. Eventually, "Ima" shifted to a public room function western living room, we assumed that the establishment of functions of each other room was promoted and led to two stories planning. We analyzed how changes in the function of the "Ima" and that arrangement method affect the discourse of the arrangement method to 2nd floor of the drawing rooms" and the bedrooms.

At the first, we confirmed that "Ima" changed its function as a public room in early Taisho era, and the discourse changed so that it was placed on the south side of the plan. In addition, around the time of the late of Taisho periods, the proposal of the "Ima" which became a Western-style room appeared. In this way the "Ima" got priority than the drawing rooms. So the discourses of the drawing rooms arranged on 2nd floor were described in middle of Taisho period intensively. From the above, we considered that the idea appeared about the changing arrangement of the drawing rooms to the 2nd floor to secure a space for the "Ima".

On the other hand, the discourses of bedroom's arrangement on 2nd floor did not formed smoothly than the drawing rooms it. It seems that the main factor was due to could not set up wet area on 2nd floor by municipal wastewater undeveloped at that time in Japan; It was difficult to put in bathroom around the bedroom like a western housing sleeping space. However, the discourses of arranging to the bedroom at 2nd floor were also appeared in early Showa period. It seems that the major factor were the idea of the western style's the Ima (sitting on chairs, that means the living room) spread among the architects, on contrarily the idea of traditional sleeping style on tatami were reduced. Also, we confirmed that there were some discourses attempt to cope with towards the problem of municipal wastewater.

The discourses regarding the drawing room's arrangement on 2nd floor were caused from only a solution for the plan of the relationship between the Ima. In contrast, the discourses regarding the bedroom's arrangement on 2nd floor were caused from to the primary purpose to establish the sleeping space in the Japanese houses. It were consistent to arrange on 2nd floor.

We considered that the discourses related to the bedroom arrangement at early Showa period leading to aspects of the the 2nd floor of the modern housing. In other words, It means that the planning idea of the 2 story houses had already begun to formed from this period. Also, from the housing books at the time, we could find that the attempt of the architects to clearly define the role of the living room changing from the traditional room concept (which allowed the inclusion of various functions).

(2016 年 12 月 6 日原稿受理, 2017 年 2 月 6 日採用決定)